

イザベラ・バードの山形路

渋谷光夫著（無明舎出版・1890円）

元来、アルカディアとはギリシャ・ペロポネソス半島の山岳地帯を指し、西洋文学では『牧歌的理想郷』の意味で使われるという。そんなアルカディアが日本にもある。山形のことだ。名付け親は英国の探検家、イザベラ・バード。明治時代に山形を南から北へと旅したが、その実り豊かな大地に触れ、名著『日本奥地紀行』の中で「アジアのアルカディ

アである」と褒めたたえた。

地元で小学校教師を務めた著者は、当時の絵図などに自ら撮影した現代の光景を織り交ぜ、バードの足跡を丹念にたどる。『バード食』と称する定食を供する食事処の夫婦も紹介される。こうした郷土史の好著が生まれたのも、バードのころから変わらぬ、山形の文化的土壌があったこそなのだろう。

（広）